慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九九〇年以降の西洋史学専攻と『史学』
Sub Title	Department of Western History and the journal Shigaku since 1990
Author	野々瀬, 浩司(Nonose, Koji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.1/2 (2022. 9) ,p.137 (137)- 163 (163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2021年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告：『史学』一〇〇年の総括と展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220900-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇二一年度三田史学会大会シンポジウム「『史学』一〇〇年の総括と展望」

一九九〇年以降の西洋史学専攻と『史学』

野々瀬浩司

はじめに

一九二一年一〇月に『史学』が創刊されたことから、二〇二一年一〇月で丁度その一〇〇年周年を迎えることになる。本報告の主目的は、それを記念して、三田史学会やその機関誌『史学』の今後について考えるための題材を提示し、本学会のさらなる学術的発展に寄与するために必要な建設的な議論を提供することにある。なお、かつて一九九〇年六月一六日（土）・一三日（土）に「三田史学の一〇〇年を語る」という大規模なシンポジウムが、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催され、その内容に関連した豊富な報告記録が『史学』第六〇巻第二・三号（一九九一年六月公刊）に収録されているが、本報告では、その内容を補完しながら、それ以降の一九九〇年から二〇二一年までの期間を中心とした西洋史学専攻の歩みと『史学』におけるヨーロッパ史に関連した研究成果について回顧し、それを基にして今後の三田史学会が進むべき方向性などについて展望したい。つまり『史学』第五九巻第一号から最新の第八九巻第四号に収録されている研究業績の中で、西洋史関係のものを抽出し、そこから何を読み取ることができるのか、さらには今後の『史学』の発展のために、どのような参考可能な題材がみつけられるのかについて考察することが、本報告の具体的な目的である。

まず過去の研究成果を、時系列に沿って雑然と並べるのではなく、それを分類し整理する必要がある。そのために、考察対象となる研究業績を、古代、中世、近世、近代、現代という五つの時代に分けて、論文・書評など

の発表形態に分類して一覧表にしてまとめたものを、補足資料として掲載したので、参照してほしい。時代区分自体には、その時の歴史観や価値観が反映され、そこには主観的な判断基準が多分に含まれているが[1]、事実を整理するための便宜的な必要性から、以下のような観点でそれぞれの時代を分類した。すなわち古代は、ギリシアのポリス時代から西ローマ帝国が滅亡した四七六年まで、中世はゲルマン人の移動から一五一七年の宗教改革の勃発以前の時期、近世は宗教改革とフランス革命（一七八九年）の間のアンシャン・レジーム時代、近代はフランス革命と第一次世界大戦の勃発（一九一四年）までの時期、現代は第一次世界大戦やロシア革命の勃発以降としたい。まずそれぞれの時代に関する研究業績を概観して、どのような特徴がみられたのかについて考察し、最後にそれを総括して全体的な提言を行いたい。

【古代史】

一九九〇年以降の『史学』に収録された古代史研究においては、真下英信氏が、多数の外国語文献の書評を含めた重要な研究を残している。真下氏は、アテーナイの民主制を批判した伝クセノポン作『アテーナイ人の国制』を主な史料として、それに関する詳細な学説史の整理と綿密な文献学的考察に依拠して、古代アテーナイ政治に関する分析を行っている。その調査対象は、民主制、抽籤制度、自由、平等、奴隷、犠牲という儀礼からみた社会の特質、政治と賄賂の関係、政治思想などの広範囲な分野に及び、当時のアテーナイの政治や社会の実態を明らかにしている。真下氏の研究は、研究書として慶應義塾大学出版会で公刊され、本塾文学研究科の博士論文として認められた[2]。それ以外では、鎌田伊知郎氏が、古代ラテン・キリスト教詩人アウレリウス・プルデンティウス・クレメンスによって著された『ペリステファノン』の弁舌を考察して、古典古代的教養とキリスト教的な教養形成の関係性を示す事例について思想史的に分析した論文が残されているだけである。他の時代に比べ、『史学』における古代西洋史研究は著しく乏しいことは明白である。このことは、ルネサンスや宗教改革などの重要な社会・文化的な運動が古代世界への回帰として始まり、今日のヨーロッパ社会の基底を生み出したことを考えれば、まことに残念でならない。

【中世史】

中世ヨーロッパにおいては、カトリック教会史とイングランド・スコットランド史という二つの分野において、最も充実した研究成果が残されている。坂口昂吉氏は、これまでの研究成果を「中世の人間観と歴史―フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ―」という題名の博士論文としてまとめ、人間観と歴史観という視点でフランシスコ修道会の歴史を中心として、中世ヨーロッパの教会史に関する分析を行い、神学思想史研究と歴史研究を総合的に考察した独自の歴史研究を展開した。また、坂口氏が研究余滴として著した、「三つの指輪」をはじめとした五つのエッセイは、『史学』という学術雑誌に多彩な広がりを加えている。中世の異端審問やヴァルド派の研究で成果を残した神崎忠昭氏は、「フランチェスコ会の発展と伝記上のフランチェスコ像」という論文で、アッシジのフランチェスコ[3]が有していた「平和の使徒」というイメージに加え、終末論上の「第二のキリスト」としての印象がフランチェスコ会の発展の中で果たしてきた役割と意味について考察した。三森のぞみ氏は、一四・一五世紀のフィレンツェの教会史を研究テーマとして選び、その地域の司教選出規定の分析を通して、領域国家化の過程におけるコムーネ権力、教皇、大司教、司教座聖堂参事会などの聖俗諸権力の諸関係の変化を明らかにした。さらに三森氏は、フィレンツェ司教区における聖職禄をめぐる争いについて考察し、地元教会勢力の持っていた聖職者選出に関する権限を弱めようとする教皇側の政治的意図と集権化過程を解明した。宮本陽子氏は、オスマン帝国の伸長による政治的な危機が高まる状況下で書かれたトルコ関係出版物において、フィオレのヨアキムなどによる中世の予言が、当時の社会にどのような影響を及ぼしていたのかについて分析し、そこには終末時の反キリストや迫害者や神の鞭などのイメージと、十字軍思想が存在していることを明らかにした。そして宮本氏は、一三世紀に成立した中世最大の百科事典であるボーヴェのヴィンケンティウスの『大鏡 Speculum Maius』序文における個人の〈権威〉と社会制度の〈権威〉の関係について分析を行い、近代以前にも個人に重点を置く思想の原型が存在していたことを明示した。上條敏子氏は、半聖半俗の女子の宗教団体であるベギン会の経済的活動や社会的貢献について調べ、さらに一二世紀に活躍した女子修道院長ビンゲンのヒルデガルドの幻

視体験を考察し、中世に生きる女性たちの生きざまを明らかにした。赤江雄一氏は、中世後期に活版印刷術が普及する以前に生まれた、主題聖句を用いた新しい形式の説教に着目し、托鉢修道士ベイスヴォーンによる説教の事例を通して、当時の人々のコミュニケーションのあり方と心性の実態を探求し、「好奇心」や「目新しさ」などを意味するcuriositasの概念の役割、そしてその言葉とutilitas（有用性）との関係を解明した。

中世イングランド・スコットランド史研究としては、五人の歴史家の業績が残されている。鶴島博和氏は、一〇六六年のノルマン征服以後、サクソン系の住民、特にその中の在地勢力がヨーロッパ大陸式に名前を改名していった事実の背景として、ノルマンとサクソンの融合という視点で捉えることの重要性を提示した。吉武憲司氏は、都市と農村を対立的には捉えない視点の重要性を提示した、ロッサーによる中世イングランドの都市共同体史研究に関する研究書の書評を残している。上野未央氏は、一五世紀に「キャロル」と呼ばれた俗語歌謡のテクストの分析を通して、中世イングランドの多様な聖母マリア像、例えば幼子の母などのイメージを明らかにし、その背後にある執り成しの思想の実態を示した。近藤佳代氏は、アングロ・サクソン期のマッチェルニー修道院に保管されていた、「チャーター」と呼ばれる獣皮紙に記された土地の権利証書を分析し、その偽作の時期と理由について考察し、一二世紀後半から一三世紀前半には、司教や世俗権力による同修道院に対する権益の侵害が激しくなり、それに対抗する必要性が増していたことなどを明示した。坂下拓治氏は、スコットランド王ロバート一世による治世の時期（一三〇六～二九年）を対象にして、王権が憲政上意味のある印璽を常用して、国璽（王国印章）と王璽（個人印章）という二種類の印璽を使い分け、イングランド王と対等な立場に立つための政治的手段の一つとして、それを利用し、独立的な国家形成に尽力した政治的姿勢を明らかにした。

中世における低地地方の修道院所領に関する研究に従事してきた舟橋倫子氏は、寄進文書・所領確認文書・紛争解決文書などの史料を用いて、領主権力であったヴィレール、オルヴァル、フロレフという三つの修道院の社会経済的側面に着目し、在地有力層などの周辺社会との相互依存関係について明らかにし、教会史と社会経済史を総合的に結び付ける成果を残した。なお舟橋氏は、これまでの研究成果を「一二世紀ベルギーにおける改革派

（シトー会・プレモントレ会）修道院の所領形成と周辺社会」と題する博士論文としてまとめた[4]。藤本太美子氏は、一二世紀末におけるフランスのノルマンディー公領のラ・トリニテ修道院に関係した「カルチュレール」という文書史料の詳細な分析に依拠して、フランスとイングランドに散在する所領の経営実態について明らかにし、ラ・トリニテ修道院がノルマンディー公＝イングランド王家やサン＝テチエンヌ修道院からの自立化を目指していたことを指摘した。「環地中海都市の慈善と救貧：中世から近世へ」という題名の三田史学会総合部会シンポジウムにおいて、河原温氏は、中近世ベルギーのブルッヘの事例を中心に考察して、聖霊ターフェルという教区単位の地縁的でインフォーマルな貧民救済組織の活動を明らかにした。一三・一四世紀のケルンにおけるユダヤ人の自治獲得過程やその保護の状況に関する考察から研究を開始した岩波敦子氏は、「死者の想起」を意味するmemoriaという言葉の変遷に関する研究を通して、中世の人々の時間意識などの心性史の分野へと研究の射程を広げ、さらに国際シンポジウムを企画し、その成果を公刊するなど『史学』で複数の業績を発表している。真川明美氏は、ピピン三世、カールマン、カール大帝などのカロリング朝の君主に「ローマ人のパトリキウス」という称号が授与されていた事実と関連して、その称号がどのように受容されていったのかについて、当時のイタリア半島の情勢を考慮しながら、比較検討した。「地中海世界の旅人たち：中世から近世へ」という三田史学会総合部会シンポジウムにおいて、関哲行氏は、中近世スペインにおけるユダヤ人、キリスト教徒、モリスコの移動の様態について説明した。

その他、史料研究に関わる業績も公刊されている。二〇〇七年三月に行われたロラン・モレルの講演の邦訳では、七～一二世紀に成立した文書史料を素材にして、オリジナルとは何かについて考察されている。二〇〇九年一一月に日吉キャンパスで開催された講演録として、中世ドイツ語圏の文書形式学や尚書局研究に関わるメルジオフスキーとヴィダーによる研究報告の邦訳が掲載されている。さらに坂下拓治氏は、中世スコットランド王権によって行政や処理の遂行の過程で作成され、保管された公文書の特質について詳細に紹介している。

このように中世ヨーロッパ史研究において豊かな研究成果が残された背景には、中世イングランドの法制史・行政史や封建社会の研究で成果を残した森岡敬一郎氏と、

カトリック教会史家の坂口昂吉氏が残した知的遺産とその継承との関連性があると考えられる。特に『史学』第六六巻第三号において坂口昂吉氏の退職を契機に企画された特集に、そのことが如実に表れている。『史学』において西洋史研究に関係した、これに類した企画が行われなくなったことは、非常に寂しく感じる。近年両氏が相次いで逝去されたことに対しては、心から哀悼の意を表するとともに、まことに残念でならない。

【近世史】

近世においては、とりわけイングランド史研究で多くの成果が得られた。清水祐司氏は、エリザベス一世時代と初期スチュアート期における四季法廷書記や治安判事に関する史料分析を通して、ケントとランカシャの事例を中心に、地方の行政・裁判業務を担っていた治安判事制度の実態、特に大陪審に対する説示や訓戒の役割を明らかにした。また同氏は、ケント州の治安判事を務めたウィリアム・ランバート（一五三六～一六〇一年）の事例から、テューダー朝期の州共同体、中央と地方の関係について考察した。高橋裕一氏は、ナサニエル・ケントとトマス・クレイの史料を通して、一七・一八世紀のイングランドのジェントルマンとその所領管理人（steward, bailiff, agent など）によるエステイト経営の実像を明らかにした。北條雅人氏は、ピューリタン革命という内乱の学説史を、軍事史的側面から整理し、軍事革命論の視点からイングランド議会側の軍事行政機構の展開について分析し、職業的な新しい軍隊の創出の経緯とその兵站管理のシステムを明らかにした。影山明日香氏は、一六世紀のイングランドにおいて国家によって貧民救済と浮浪者懲罰が実施され、救貧税の強制賦課・貧民の徒弟奉公・屋外救貧の三原則が成立した時期に、同時代人がプロテスタントの説教の中で貧民救済をどのように捉えたのかについて、伝統的な「神の貧民」のイメージと関連させながら考察した。仲丸英起氏は、近世イングランドの議会制度に関して多数の成果を残し、本塾文学研究科で博士（史学）号を取得した。仲丸氏は、文字史料に加えて統計学的な手法も用いて、エリザベス一世時代の下院における議会儀礼などの象徴的側面、議事手続きにおける実務的必要性、下院議席の創設、議員と選挙区との関係について考察し、近代化論とは別の問題意識から議会制度の展開を捉えなおした。

藤田苑子氏は、一八世紀後半のフランスでは死亡率の

低下に伴い人口の増加が顕著にみられたが、その時期に高齢者に対するイメージが明るい肯定的なものへと変化したことについて明らかにしたうえで、人口統計学的に人口の高齢化が始まったことを明示した。さらに藤田氏は、一八世紀のレンヌ市とその周辺に関わる死後動産目録の分析を通して、当時の人々がどのようなものを消費して生活し、人間関係を形成していたのかについて解明した。山内邦雄氏は、フランソワ一世の治世下で活躍した財務官僚ジャック・ドゥ・ボーヌの財政政策と彼の処刑という出来事を通して、近世フランス王国の財政構造が「王家家産」会計から「王国」財政へと変化していった経緯を明らかにした。ドイツ農民戦争と宗教改革の関係について分析してきた野々瀬浩司氏は、ルターやツヴィングリなどの宗教改革の神学が一六世紀初めのスイスや西南ドイツの農村社会に、どのような影響を与えたのかについて考察し、農奴制問題や共同体自治運動と関連させながら、ベルンやゾーロトゥルンなどの地域研究に着手し、実証的な分析を行った。その他に野々瀬氏は、古代から中世までのキリスト教の戦争観の変遷について概観したうえで、宗教改革期にルターによって十字軍思想が根本的に否定されていった思想的背景を考察した。

鈴木康子氏は、徳川幕府の貿易縮小令などで一七五〇年前後に日蘭貿易が危機に陥ったが、それに対するオランダの商館長や東インド総督の動向や、日蘭両国による貿易協定締結の経緯を明らかにした。

近世フィレンツェ史を専門とする北田葉子氏は、コジモ一世の時代の絶対主義的な文化政策の一つとして、アカデミア・デッリ・ウーミディからアカデミア・フィオレンティーナへと改編されていった経緯を考察し、その背景に貴族の官僚化と君主の宮廷への知識人の統合の過程があったことを明らかにした。また北田氏は、共和制支持者であるベネデット・ヴァルキがフィレンツェに戻り、コジモ一世の宮廷でどのような活動を行ったのかについて考察した。原田亜希子氏は、教皇領という教会国家に属していたローマ市に居住するエリート層が、人的流動性の高かった一六世紀後半に、その社会的構成や役職就任状況などにおいて、どのように変化していったのかについて詳細に考察し、古い家系の主導の下では新しい家系の参入が限定的であったという実態を明らかにした。北田氏と原田氏は、さらなる実証研究を進めてその成果を博士論文としてまとめ、本塾文学研究科で博士（史学）号を取得した。宮前安子氏は、スペイン国立歴

史文書「異端審問セクション」の成立事情やその史料の内容と分類を概観し、それに関する研究アプローチがアナール学派の影響によって変化し、裁判記録の統計化、裁判手続きのメカニズム、中央と地方管区との関係などにも及んでいることを説明した。北濱佳奈氏は、フェリーペ二世時代を中心にカスティーリャ王国のコルテスという身分制議会に関する研究動向を、一九七五年前後で分けて説明し、ミリョーネス新税をめぐる王権と代表派遣都市との関係を考察することの意義について論じた。

二〇一七年六月に、「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義―五〇〇周年に寄せて―」と題して、三田史学会大会総合部会シンポジウムが開催され、三つの講演とそれに関連した活発な質疑応答が行われたが、その内容が『史学』第八八巻第一号に掲載されている。森田安一氏は、ルターの肖像画などの文字史料以外の視覚的な題材を用いた多角的な視点から宗教改革研究を行い、絵画などの図像を考察対象とする美術史研究と、主に文字で記された史料の分析に依拠してきた歴史研究との間の相互交流を促進するための可能性を広く開いた。西川杉子氏は、より長期的な視点から、さらには国際的なネットワークの視点から、幅広く宗教改革運動を考察し、プロテスタントの諸宗派における連携運動の実態を解明したことにおいて、重要な学術的意味を有する業績を残した。田上雅徳氏は、一六世紀にはまだ個人意識が十分には成立していなかったことを指摘したうえで、聖餐式を中心とする宗教儀礼や教会制度の役割を重視する精神的態度を強調して、政治思想史の観点から中世カトリック教会とルターやカルヴァンなどのプロテスタント運動との間にある類似性や連続面に着目したことにおいて、学術的に重要な意義を有する指摘を行った。このような内容の本格的なシンポジウムが、三田史学会大会で開催され、その成果が『史学』に残されていることは、特筆すべきことである。

【近代史】

近代においては、英米史、特に北アメリカ史に関して非常に充実した研究業績が残されている。伊東剛史氏は、労働者教育の推進のために発刊された『ペニーマガジン』とその編集者チャールズ・ナイトを事例にして、一九世紀前半の英国の出版文化を考察し、ミドルクラス対労働者階級という枠組みや、前者によるモラル・ヘゲモニーという見方だけでは把握しきれない側面を明らかに

した。さらに伊東氏は、一九世紀のロンドンの街角に登場した「幸福な家族」という名の動物の見世物に焦点を当て、当時の社会の動物観と人間の自己意識を考察した。松本佐保氏は、一八四八年にヨーロッパ各地で革命が勃発したことが、イギリスにおけるチャーティスト運動などの社会運動にどのような影響を及ぼしたのかについて、当時ロンドンに滞在していたイタリアの民族主義運動家ジュゼッペ・マッツィーニの活動を通して実証的に考察し、それに対して英国政府がどのような態度をとったのかについても明らかにした。そして松本氏は、マッツィーニの影響を受けた急進派による社会運動が、立憲君主制などの既存の政治体制を脅かす可能性を有するものとして、英国政府にとって懸念材料になっていた点を指摘した。

近代アメリカ史で多くの成果を残した山口房司氏は、企業の独占化が進行する中、シカゴの鉄道車輌会社で発生したプルマン・ストライキ（一八九四年）の経過を考察し、憲政史と労働史におけるその出来事の意義を提示し、その他に砂糖トラスト判決やシャーマン反トラスト法の分析を通して、当時の独占の実態を明らかにした。さらに山口氏は、二〇世紀初頭のアメリカにおける自由放任主義、ニューディール後期の反トラスト政策、財産権の保護の問題にも考察を加えている。佐々木豊氏は、二〇世紀初頭の革新主義時代のアメリカ合衆国の諸都市において、急速な都市化と社会的移動の増加に伴い、当時の人々は伝統的なコミュニティの崩壊に直面したが、それに対して「スクール・ソーシャル・センター」運動の主唱者が、道徳主義的な理念に依拠してどのようにその再生を試みていったのかについて考察した。山本英政氏は、一九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカ合衆国において、スラヴ・ラテン系移民が増加したことによって深刻な社会問題が発生し、マサチューセッツ州の国会議員ヘンリー・カボット・ロッジが移民排斥運動を展開したが、それに対して当時の大統領がどのような政策をとったのかについて考察し、ロッジの思想的背景と識字テスト条項の成立に関わる諸問題の特質について深く言及した。紫藤潤一氏は、一九世紀末から二〇世紀初頭におけるアメリカ経済の状況を踏まえて、ミューチュアル・ライフ社、ニューヨーク・ライフ社、エクイタブル・ライフ社という三つの大規模な生命保険会社が、どの程度の資金を、どのように調達し、そして投資にまわしていったのかについて考察し、巨大な資金発生のメカニズム

を解明した。大森雄太郎氏は、「アメリカ革命とジョン・ロック―アメリカ革命政治思想史研究の一視角」という題名で、九回に分けて『史学』に長大な論文を掲載し、アメリカ独立革命とロックの思想との関係を軽視する傾向のある「共和主義」パラダイムに対する反省から、ロックの思想を歴史の中に戻す作業を試みた。大森氏は、膨大な史料の分析に依拠して、アメリカ植民地人がロックの『統治論第二論』の思想、具体的には「同意による統治」の原則、移住の自然権、抵抗権論などをどのように使用したのかについて、①砂糖法の成立（一七六四年）から印紙法の廃止（一七六六年）の時期、②タウンゼント諸法の成立（一七六七年）からの六年間、③茶法の成立（一七七三年）以後の二年間、④レキシントン・コンコード（一七七五年四月）から独立宣言（一七七六年七月）までの期間という四つの時期に分けて、実証的に考察した。この大森氏の研究は、一九九〇年以降に『史学』に掲載された近代ヨーロッパ史研究の中では、中核的な位置を占めていることは間違いない。綾辺昌朋氏は、一九一五年に結成された第二次クー・クラックス・クラン運動に関する再検討を行い、市民に奉仕する秘密結社としてのシヴィック・クランの側面、つまり慈善、教育改革、法の執行、政治参加などに携わった姿を明らかにした。

近代ドイツ史研究においては、特に社会思想史とそれに関連した研究成果が顕著に残された。東畑隆介氏は、絶対主義時代に都市の共同体的自治が空洞化されていったが、一八〇八年にシュタインの「都市条令」が成立してそれが施行されると、シュタインとハルデンベルクの改革政治が、理念と現実の間の矛盾に直面しながらも、市民の政治的成熟の形成に貢献したことを、ベルリンなどの事例を挙げて明らかにした。また東畑氏は、手工業者の経済的な救済を図ったシュルツェ・デーリテュの思想と協同組合運動に関する分析を通して、ドイツ自由主義の特質を解明した。なお東畑氏の博士学位請求論文審査要旨が、『史学』第六六巻第四号に掲載されている。勝又章夫氏は、マルクスとエンゲルスによって「歴史なき民」とみなされたチェコやスロヴァキアの少数民族を事例として、二人の思想における Nation と Nationalität の理論的背景を探求し、国民概念が国家論・革命論の中で果たした役割を明らかにし、一八四八年革命期において「歴史なき民」の理論を歴史的に位置づけようとした。さらに勝又氏は、エドゥアルト・ベルンシュタインやオ

ットー・バウアーなどのマルクス主義の思想家が、少数民族問題にどのように関わったのかについて考察した。守屋徹氏は、シュタインとハルデンベルクの改革思想を検討したうえで、教会改革史の視点からヘーゲルの国家論における国家と教会の関係について考察した。木村航氏は、一九世紀前半のバーデン大公国において出版の自由が、自由主義者の社会理念の中でどのような権利として位置づけられ、いかなる効能をもたらすものとして考えられていたのかについて分析した。富村圭氏は、『ハレ年誌』を創刊した急進主義の主要な担い手であったアルノルト・ルーゲが、三月前期のドイツにおける教会論争の中で、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』で展開されていた宗教批判を、どのように受容していったのかについて考察した。

平山栄一氏は、フランス革命二〇〇年祭記念を契機にして発刊されたフランス語、英語、邦語の研究書の内容を紹介し、学会の動向を明快に整理した。鈴木邦夫氏は、フランス革命の影響を受けてイタリア各地で民衆蜂起が勃発したが、一七九六～九九年のトゥリエンニオ（trienio）の時期の重要性に着目し、トスカーナ大公国を事例にして三人の大公の政策と蜂起との関係について考察した。八嶋由香利氏は、一九世紀後半に発展した「カタラニスモ」と呼ばれるスペインにおける地域ナショナリズムに対して、地主、中小農民、農業組合運動の指導者などの社会層が、歴史的な展開の中で、どのような関わりをもったのかについて考察し、その多面的な側面を明らかにした。さらに八嶋氏は、スペイン統治下にあった時期を経験したキューバなどのカリブ海域と、カタルーニャの近代化との関係を、一八世紀末から一九世紀前半の時代を中心に、交易ネットワークを通した人・モノ・資金の移動から分析した。山道佳子氏は、啓蒙化や近代化を目指したカルロス三世時代（一七五九～一七八八年）のバルセローナ市における「聖体祭」のプロセッションという祭りを事例として、市参事会議事録や陳情書の分析を通して、政治文化や社会構造の変化、エリート文化と民衆文化の関係について考察した。さらに山道氏は、一七七〇年から一八三〇年代までの時期を中心に、バルセローナの絹産業に関与していたギルドの実態を調査し、ギルド規約、公証人文書、結婚契約書、遺言書などの史料に依拠して、徒弟制度の機能や、ギルド社会で果たしてきた女性の役割の多様性を明らかにした。

【現代史】

近現代アメリカ史の専門家である佐々木豊氏は、「赤狩り」時代において、マッカラン委員会の活動を契機として、極東問題の専門家を巻き込んだ、太平洋問題調査会（ＩＰＲ）という民間の研究団体の研究活動の理念や原則、特に「言論・表現の自由」や「学術的客観性」の問題に関する論争の内容を考察し、共産主義との繋がりが認定されたことなどを理由にして、ＩＰＲが解散していった経緯を明らかにし、冷戦下のアメリカ合衆国の知的状況の一側面を提示した。山倉明弘氏は、第二次世界大戦期において社会的マイノリティーであるハワイ在住の日系人が、敵性外国人として、どのような処置を受けたのかについて探求し、手記やオラルヒトリーで得た記録などを史料として用いて、アメリカ大陸本土の場合と比較しながら、逮捕、取調、処分決定、本土移送、抑留などのプロセスを調べ、さらにハワイに残された日系人家族の生活状況について明らかにした。

現代ドイツ史においては、とりわけ原信芳氏が顕著な成果を残している。原氏は、ドイツ（再）統一に関して、政治的プロセス・経済的不可避性・排外主義の台頭とＤＲのアイデンティティに分けて論じている。また原氏は、ナチス時代においてドイツ抵抗運動に関する当時の研究動向をまとめたうえで、保守派抵抗運動のポスト・ナチズム構想について分析し、それはビスマルク以前の旧体制に近いものを回復するために試みられた運動であり、ナチズムに対する権威主義的な克服であると規定した。さらに原氏は、ワイマール共和国時代に実施された雇用創出や失業保険に関わる経済政策について考察した。神田順司氏はシンポジウムで報告を行い、戦争遺跡としてのベルリンの地下壕、特に官邸の庭に掘られた総統地下壕が冷戦期に放置され続け、その調査や保存の問題が東西の対立に翻弄されてきた事実を明らかにした。住司憲史氏は、ヴァイマル共和国時代の北ドイツ地方の農村に生きた人々の生活を扱った文献の書評を行っている。山本晶子氏は、一九三九年にベルリンで行われた日本古美術展に纏わる日独文化交流史を扱った、安松みゆき著『ナチス・ドイツと〈帝国〉日本美術―歴史から消された展覧会―』（吉川弘文館、二〇一六年）に関する書評を残している。梶川伸一氏は、二〇一三年の三田史学会大会において、レーニン体制の支配構造と「赤色テロル」と呼ばれる弾圧と共産党独裁の経緯に関する講演を

行い、その内容を論考としてまとめた。石丸由美氏は、アルバニアで開催された国際南東欧学学会第九回大会に出席した時の体験を報告した。

おわりに

以上、一九九〇年以降に公刊された『史学』第五九巻第一号から第八九巻第四号までに掲載された西洋史に関わる研究業績の内容を概観してきたが、次のようなことが明らかになった。まず、二つの学位請求論文審査要旨が『史学』の彙報に掲載されていなかった事実が判明した。北田葉子氏と安岡直氏には、当時の編集委員に代わって心から謝罪したい。二人の博士論文に関する題名などの情報は、それぞれ北田葉子君提出学位請求論文審査要旨「近世フィレンツェにおける文化とプロパガンダ―コジモ一世統治前期の文化政策（一五三七～一五六〇）―」（二〇〇一年六月二七日）と安岡直君提出学位請求論文審査要旨「初期ルカーチにおける思想形成―『歴史と階級意識』への道：革命的急進主義とその限界―」（二〇一五年二月二六日）である。また、補足資料の西洋史関係研究業績一覧表にもあるように、それぞれの時代の論文などの研究成果の内訳は、公刊形態のジャンルなどのカウントの方法によってその数字が変わる場合もあるが、以下の通りである。[5] 古代史関係のものは、論文二、書評九、博士論文審査要旨一であり、中世史についての研究成果は、論文二三、研究ノート二、シンポジウム報告・講演録一二、書評二、論文訂正一、著作目録一、研究余滴五、博士論文審査要旨二であり、近世史に属するものは、論文二五、研究ノート五、史料紹介二、シンポジウム報告・講演録七、書評・新刊紹介三、博士論文審査要旨四であり、近代史関連のものは、論文三九、研究ノート一、書評・新刊紹介一、研究動向二、博士論文審査要旨二であり、現代史に関わるものは、論文八、研究ノート二、シンポジウム報告・講演録一、書評・新刊紹介三、研究動向一であった。

このように過去の二〇年間を振り返ると、文学研究科という大学院での教育が実施可能な本塾において、学術的伝統の継承と発展の重要性を再認識した。中世史・近世史・近代史研究においては、その学問上の遺産が消えかかりながらも、その命脈を保って存続しているが、現代史と古代史研究ではあまり多くの成果は残されていない。また、中近世史において王権や領主制に関する研究が幾つかみられるものの、全般的には被支配者や民衆の

側、マイノリティー、中間層、共同体の視点に立った研究が多く散見された。研究分野としては、政治・社会・神学に関わる思想史、教会史、政治史、文化史、社会史、社会経済史に属するものが多かった。このことは、三田史学会の中心的な創設者の一人である田中萃一郎氏が残したリベラルな在野精神と総合的な学風との関連性があるように思えてならない。研究対象の地域としては、英米史研究が最も充実している。これは、福沢諭吉以来、江戸時代の蘭学から離れて、日本の近代化と啓蒙のためには、イギリスとアメリカをはじめとした先進的な洋学の成果を積極的に取り入れてきた、本塾の建学精神とあながち無関係ではないように感じる。また近年では、英米独仏という近代世界をリードしてきた大国の歴史だけではなく、ベルギーやスイスなどの歴史や、各地の地域史研究も散見されるようになった。

最後に『史学』の今後の在り方に関わる課題についても、簡単に言及したい。教員の退職を契機に企画された特集、研究余滴、余白録、名誉教授が亡くなられた時の追悼文、定年退職の教員の著作・文献目録などの掲載が、徐々に編集企画から消えていっている。また、書評や新刊紹介の投稿は減少の傾向にある。学術論文以外にも、『史学』の内容を豊かにするためには、多種多様な形態の投稿や企画が求められる。さらには、本塾文学部には所属してはいないが、塾内に所属している歴史研究者との関係（法・経・商・日吉・藤沢、慶應義塾系列高校）の重要性を痛感した。今回言及した研究の中では、八嶋由香利氏、木村航氏、北濱佳奈氏などが貴重な成果を残している。そして、本塾文学部や文学研究科の出身ではない研究者の投稿の契機の創出が、今後重要であると感じる。これまで西洋史を専門とする論文では、そのような事例は、わずかしか残されていない。二〇二一年度の総合部会シンポジウムを通して、三田史学会と『史学』が果たしてきた歴史学全般への学術的貢献に関する理解を深めながら、現在同誌が抱えている課題をより正確に認識し、その今後について考えるための題材を提示することによって、本学会のさらなる学術的発展に寄与するために必要な建設的な議論が生み出されることを祈念したい。

註

（1）ジャック・ル＝ゴフ著／菅沼潤訳『時代区分は本当に必要か？：連続性と不連続性を再考する』（藤原書店、二〇一六年）。

（2）「真下英信君学位請求論文審査要旨」の表題（『史学』第七二巻第一号、二〇〇三年、一二一頁）では、「伝クセポノン『アーテナイ人の国制』の研究」となっていたが、正式な博士論文でそれは「伝クセポノン『アテーナイ人の国制』の研究」と記されていたため、後者を優先し、前者の表題を修正した。

（3）修道会としての「フランシスコ会」と「フランチェスコ会」は、当然同一のものを指すが、本稿では個別の論文における表記に従っている。その他に、「ワイマール」と「ヴァイマル」などの事例があることも了承していただきたい。

（4）「舟橋倫子君学位請求論文審査要旨」の表題（『史学』第七〇巻第二号、二〇〇一年、一七五頁）に誤植があり、修正した。

（5）関哲行氏のシンポジウム報告（『史学』第八〇巻第二・三号、二〇一一年）とシンポジウムのコメント（『史学』第八七巻第三号、二〇一八年）の内容は、中世史と近世史にまたいでいるので、両方の時代にカウントした。河原温氏のシンポジウム報告（『史学』第八七巻第三号、二〇一八年）は、内容から中世史に重点が置かれていると判断した。

補足資料　「西洋史関係研究業績一覧表（『史学』第 59 巻第 1 号～第 89 巻第 4 号）」

古代史関係の研究				
『史学』巻号	公刊時期	発表形態	題名	著者
第 59 巻第 1 号	1990 年 3 月	書評	Josiah Ober, *Mass and Elite in Democratic Athens; Rhetoric, Ideology, and the Power of the People*, (Princeton, 1989)	真下　英信
第 59 巻第 4 号	1990 年 12 月	書評	Robert Develim, *Athenian Officials, 684-321 B.C.*, (Cambridge, 1989)	真下　英信
第 61 巻第 1・2 号	1991 年 12 月	書評	C.G. Starr, *The Birth of Athenian Democracy, The Assembly in the Fifth Century B.C.*, (New York, 1990)	真下　英信
第 63 巻第 1・2 号	1993 年 8 月	書評	D.L. Stockton, *The Classical Athenian Democracy* (Oxford, 1990)	真下　英信
第 63 巻第 3 号	1994 年 3 月	書評	P. Millett, *Lending and Borrowing in Ancient Athens* (Cambridge, 1991)	真下　英信
第 64 巻第 1 号	1994 年 9 月	書評	J. Trevett, *Apollodoros the Son of Pasion* (Oxford, 1992)	真下　英信
第 64 巻第 2 号	1995 年 3 月	書評	P. Harding, *Androtion and the Atthis* (Oxford, 1994)	真下　英信
第 66 巻第 1 号	1996 年 9 月	書評	James L. O'Neil, *The Origins and Development of Ancient Greek Democracy* (London, 1995)	真下　英信
第 66 巻第 3 号	1997 年 3 月	論文	伝クセノポン作『アテーナイ人の国制』の政治思想史的考察	真下　英信
第 66 巻第 3 号	1997 年 3 月	論文	プルデンティウス『ペリステファノン』における弁舌について	鎌田伊知郎
第 68 巻第 3・4 号	1999 年 5 月	書評	Helen Parkins and Christopher Smith (eds.), *Trade, Traders and the Ancient City* (London and New York, 1998)	真下　英信
第 72 巻第 1 号	2003 年 2 月	彙報	真下英信君提出学位請求論文審査要旨「伝クセポノン『アテーナイ人の国制』の研究」	

古代史内訳：論文 2、書評 9、博士論文審査要旨 1

中世史関係の研究				
『史学』巻号	公刊時期	発表形態	題名	著者
第59巻第2・3号	1990年7月	論文	中世都市ケルンに於けるユダヤ人保護：都市の自治権獲得の過程の中で	岩波　敦子
第59巻第4号	1990年12月	論文	„Türkenbüchlein“ における中世の予言の影響に関する一考察	宮本　陽子
第60巻第1号	1991年4月	論文	『征服』直後におけるサクソン系住民の改名について：アングロ＝ノルマン期における農村の社会的諸関係の解明に向けて	鶴島　博和
第61巻第1・2号	1991年12月	書評	Gervase Rosser, *Medieval Westminster 1200–1540*, (Oxford, 1989)	吉武　憲司
第61巻第3・4号	1992年3月	論文	ユダヤ人団体のトポグラフィー：ケルン市を事例として	岩波　敦子
第61巻第3・4号	1992年3月	訂正	続『征服』直後におけるサクソン系住民の改名：前稿の訂正	鶴島　博和
第63巻第3号	1994年3月	シンポジウム	西欧中世における民衆宗教運動と言語	坂口　昂吉
第64巻第2号	1995年3月	論文	シトー会グランギアの諸側面：ヴィレール修道院十二世紀ヌーヴ・クール関係文書の分析	舟橋　倫子
第65巻第1・2号	1995年10月	論文	十四、十五世紀フィレンツェにおける司教選出とその法規定	三森のぞみ
第65巻第4号	1996年6月	論文	ビンゲンのヒルデガルト：一女子修道院長の生涯と作品	上條　敏子
第66巻第1号	1996年9月	論文	ボーヴェのヴィンケンティウスの『大鏡 Speculum Maius』序文における個人の〈権威〉と社会制度の〈権威〉の関係に関する一考察	宮本　陽子
第66巻第3号	1997年3月	論文	十二世紀ヴィレール修道院宛の教皇文書と領邦君主文書	舟橋　倫子
第66巻第3号	1997年3月	論文	中世の時間認識と memoria	岩波　敦子
第66巻第3号	1997年3月	論文	フランチェスコ会の発展と伝記上のフランチェスコ像	神崎　忠昭
第66巻第3号	1997年3月	論文	十四世紀初頭におけるフィレンツェ司教区内一聖職禄を巡る争いについて：Pieve di Santa Maria Impruneta	三森のぞみ
第66巻第3号	1997年3月	著作目録	坂口昂吉先生略歴・主要著作目録	
第69巻第3・4号	2000年5月	論文	プレモントレ会修道院の所領形成と周辺社会：フロレフ修道院十二世紀文書の分析	舟橋　倫子

第 69 巻第 3・4 号	2000 年 5 月	書評	坂口昂吉著『中世の人間観と歴史：フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ』（創文社、1999 年）	神崎　忠昭
第 70 巻第 1 号	2000 年 9 月	彙報	坂口昂吉君提出学位請求論文審査要旨「中世の人間観と歴史：フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ」	
第 70 巻第 2 号	2001 年 2 月	彙報	舟橋倫子君提出学位請求論文審査要旨「十二世紀ベルギーにおける改革派（シトー会・プレモントレ会）修道院の所領形成と周辺社会」	
第 70 巻第 3・4 号	2001 年 7 月	論文	十二世紀末ラ・トリニテ修道院のカルチュレールをめぐって：クロス＝チャネル・エステイトの構造解明のために	藤本太美子
第 74 巻第 3 号	2006 年 1 月	研究余滴	伝説と史実	坂口　昂吉
第 74 巻第 4 号	2006 年 3 月	論文	中世後期の説教における *Curiositas* の重要性	赤江　雄一
第 74 巻第 4 号	2006 年 3 月	研究余滴	三つの指輪	坂口　昂吉
第 75 巻第 1 号	2006 年 6 月	研究余滴	小教区制の起源	坂口　昂吉
第 75 巻第 2・3 号	2007 年 1 月	研究余滴	キリストの復活をめぐって	坂口　昂吉
第 76 巻第 1 号	2007 年 6 月	研究ノート	十二世紀ゼーラントにおけるアフリヘム修道院所領をめぐる一考察	舟橋　倫子
第 76 巻第 1 号	2007 年 6 月	研究余滴	釈尊と修道士：バルラームとヨザファト	坂口　昂吉
第 76 巻第 2・3 号	2007 年 12 月	論文	文書オリジナルとはなにか：七〜十二世紀の文書史料に関するいくつかの指摘	ロラン・モレル著／岡崎　敦訳
第 78 巻第 3 号	2009 年 10 月	論文	十五世紀イングランドの聖母マリア像：俗語歌謡のテクストから	上野　未央
第 79 巻第 1・2 号	2010 年 3 月	講演録	解説　ヨーロッパ中世史科学から見るドイツ歴史学：回顧と展望	岩波　敦子
第 79 巻第 1・2 号	2010 年 3 月	講演録	ドイツ語圏における文書形式学とモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ	Mark Mersiowsky 著／津田拓郎訳
第 79 巻第 1・2 号	2010 年 3 月	講演録	ドイツ中世後期に関する歴史学と文書形式学	Ellen Widder 著／岩波敦子訳
第 79 巻第 4 号	2010 年 12 月	論文	中世における女性の経済活動および社会的貢献に関する覚書：北西ヨーロッパのベギンを中心に	上條　敏子

第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	シンポジウム	中近世スペインの旅人たち：ユダヤ人(ユダヤ教徒)、キリスト教徒、モリスコを例として	関　哲行(近世史としても分類)
第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	シンポジウム	コメント 2	小澤　実
第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	シンポジウム	コメント 4	神崎　忠昭
第 83 巻第 4 号	2015 年 1 月	論文	アングロ・サクソン期チャーターの偽作問題：マッチェルニー修道院カーチュラリーの場合	近藤　佳代
第 85 巻第 4 号	2016 年 2 月	論文	スコットランド王ロバート一世の王権と印璽(上)	坂下　拓治
第 86 巻第 1・2 号	2016 年 6 月	論文	スコットランド王ロバート一世の王権と印璽(下)	坂下　拓治
第 86 巻第 3 号	2016 年 10 月	論文	カール大帝による「ローマ人のパトリキウス」称号の受容をめぐって	真川　明美
第 86 巻第 4 号	2017 年 3 月	研究ノート	中世スコットランド史と公文書史料	坂下　拓治
第 87 巻第 1・2 号	2017 年 7 月	論文	フランドル地方のベギンホフ：十三世紀の発明：中世という時代に女性の自立が可能だったのはなぜか	上條　敏子
第 87 巻第 3 号	2018 年 2 月	シンポジウム	中近世ヨーロッパ都市の慈善と救貧：ブルッヘの〈聖霊ターフェル〉の活動を中心に	河原　温
第 87 巻第 3 号	2018 年 2 月	シンポジウム	コメント 1：中近世スペインの慈善(救貧)研究の視点から	関　哲行(近世史としても分類)
第 87 巻第 3 号	2018 年 2 月	シンポジウム	コメント 2：宗派を越える慈善と救貧：アンダルス史の視点から	佐藤健太郎
第 88 巻第 1 号	2018 年 12 月	シンポジウム	2018 年度三田史学会大会(6 月 23 日)講演会「島の歴史学」講演要旨	佐藤　孝雄、田代　和生、田村　愛理、神崎　忠昭、山口　徹、近森　正
第 89 巻第 1・2 号	2020 年 10 月	シンポジウム	コメント 2　環境史の鍵概念としての主観性と史料探索の今後	赤江　雄一

中世史内訳：論文 23、研究ノート 2、シンポジウム報告・講演録 12(二つのシンポジウム報告は近世史と重複)、書評 2、論文訂正 1、著作目録 1、研究余滴 5、博士論文審査要旨 2

近世史関係の研究				
『史学』巻号	公刊時期	発表形態	題名	著者
第59巻第4号	1990年12月	書評	E・P・トムスン、N・デイヴィス、C・ギンズブルグ他／近藤和彦、野村達郎編訳『歴史家たち』（名古屋大学出版会、1990年）	清水　祐司
第60巻第1号	1991年4月	論文	四季法廷書記官素描：初期ステュアート朝期ランカシャの事例を中心に	清水　祐司
第60巻第1号	1991年4月	新刊紹介	ペーター・ブリックレ著／服部良久訳『ドイツの臣民』（ミネルヴァ書房、1990年）	野々瀬浩司
第61巻第1・2号	1991年12月	研究ノート	ドイツ農民戦争期における「神の法」思想について：学説史の整理	野々瀬浩司
第61巻第3・4号	1992年3月	論文	ドイツ農民戦争期における「神の法」思想と「十二ヶ条」について	野々瀬浩司
第61巻第3・4号	1992年3月	史料紹介（古文書館めぐり）	スペイン国立歴史文書「異端審問セクション」について：最近のスペイン異端審問研究とその史料状況	宮前　安子
第63巻第1・2号	1993年8月	論文	ゼバスチャン・ロッツァーの俗人神学と「十二ケ条」について	野々瀬浩司
第64巻第1号	1994年9月	論文	十八世紀後期イングランドに見る所領管理「専門職」：ナサニエル・ケントの場合	高橋　裕一
第64巻第2号	1995年3月	論文	日蘭貿易の危機：1750年前後のオランダの動向	鈴木　康子
第65巻第3号	1996年1月	研究ノート	エリザベス時代の四季法廷における説示と訓戒：ケントの事例を中心に	清水　祐司
第65巻第4号	1996年6月	論文	アカデミア・フィオレンティーナの誕生：君主国家下におけるフィレンツェ文化の様相	北田　葉子
第66巻第2号	1997年1月	研究ノート	イングランド内乱軍事史：新型軍研究を中心として	北條　雅人
第66巻第3号	1997年3月	論文	ベネデット・ヴァルキのフィレンツェ帰還：フィレンツェ共和制支持者と君主国の関係	北田　葉子
第66巻第3号	1997年3月	論文	フルドリヒ・ツヴィングリの神学思想における „Gemeinde" 概念について	野々瀬浩司
第68巻第1・2号	1999年1月	論文	ウィリアム・ランバードと中央・地方(一)	清水　祐司

第 68 巻第 3・4 号	1999 年 5 月	論文	陸軍委員会の成立：第一次イングランド内乱における議会の軍政改革	北條　雅人
第 68 巻第 3・4 号	1999 年 5 月	彙報	野々瀬浩司君提出学位請求論文審査要旨「農奴制問題に関するスイス盟約者団の政策について―農民戦争の重要課題を巡って―」	
第 69 巻第 2 号	2000 年 3 月	論文	十六世紀後半イングランドの説教本に見る貧民救済の概念	影山明日香
『史学』未掲載			北田葉子君提出学位請求論文審査要旨「近世フィレンツェにおける文化とプロパガンダ：コジモ一世統治前期の文化政策(1537-1560)」2001 年 6 月 27 日	
第 70 巻第 3・4 号	2001 年 7 月	論文	近代初期におけるゾーロトゥルンの農奴制問題について：スイス北西部の封建的遺制に関する一考察	野々瀬浩司
第 72 巻第 2 号	2003 年 6 月	論文	宗教改革者と農奴制：ウルバヌス・レギウスを中心にして	野々瀬浩司
第 72 巻第 3・4 号	2003 年 12 月	論文	エリザベス治世期における議会の特質：議員と選挙区との関係を中心として	仲丸　英起
第 73 巻第 2・3 号	2004 年 12 月	論文	ゾーロトゥルンの宗教改革運動とその挫折	野々瀬浩司
第 74 巻第 1・2 号	2005 年 9 月	論文	『歴史学の実験室('laboratory of history')』：ロンドン大学歴史学研究所の軌跡	仲丸　英起
第 74 巻第 4 号	2006 年 3 月	論文	エリザベス治世期における下院議席の創設(上)	仲丸　英起
第 75 巻第 1 号	2006 年 6 月	論文	十八世紀後半フランスにおける高齢者：その増加とイメージの変化	藤田　苑子
第 75 巻第 2・3 号	2007 年 1 月	論文	エリザベス治世期における下院議席の創設(下)	仲丸　英起
第 76 巻第 1 号	2007 年 6 月	研究ノート	近世初頭カスティーリャ王国コルテスについて：最近の研究動向より、フェリーペ二世時代を中心に	北濱　佳奈
第 76 巻第 4 号	2008 年 3 月	論文	エリザベス治世期における下院の議事手続	仲丸　英起
第 78 巻第 1・2 号	2009 年 6 月	書評	Louis Montrose, *The Subject of Elizabeth: Authority, Gender, and Representation*, Chicago, 2006.	仲丸　英起
第 79 巻第 3 号	2010 年 7 月	彙報	仲丸英起君学位請求論文審査要旨「近世イングランド議会史研究：エリザベス治世期を中心として」	

第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	論文	中近世のベルン領における農奴制問題：フリーニスベルクとミュンヘンブッフゼーを中心にして	野々瀬浩司
第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	シンポジウム	中近世スペインの旅人たち：ユダヤ人(ユダヤ教徒)、キリスト教徒、モリスコを例として	関　哲行（中世史としても分類）
第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	シンポジウム	コメント 3	佐藤健太郎
第 83 巻第 1 号	2014 年 3 月	研究ノート	死後動産目録にみる人と物：十八世紀、ブルターニュ・レンヌ市とその周辺農村	藤田　苑子
第 84 巻 第 1・2・3・4 号	2015 年 4 月	論文	マルティン・ルターの戦争観：1520 年代後半の対オスマン帝国関係文書を中心に	野々瀬浩司
第 84 巻 第 1・2・3・4 号	2015 年 4 月	論文	十六世紀後半のローマ都市エリート層の変遷	原田亜希子
第 84 巻 第 1・2・3・4 号	2015 年 4 月	論文	近世コーンウォルにおける議員選出：皇太子評議会による選挙干渉とリスカード都市自治体の対応を中心として	仲丸　英起
第 87 巻第 3 号	2018 年 2 月	シンポジウム	コメント 1：中近世スペインの慈善（救貧）研究の視点から	関　哲行（中世史としても分類）
第 87 巻第 4 号	2018 年 9 月	論文	十六世紀前半におけるフランス王国財政の転機：財務官僚ジャック・ドゥ・ボーヌの事例を通して	山内　邦雄
第 87 巻第 4 号	2018 年 9 月	彙報	原田亜希子君博士学位請求論文審査要旨「近世ローマの統治と権力：十六世紀の教会国家におけるローマ都市政府と教皇庁」	
第 88 巻第 1 号	2018 年 12 月	シンポジウム	ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義：五百周年に寄せて	野々瀬浩司
第 88 巻第 1 号	2018 年 12 月	シンポジウム	ルター肖像画とルター改革の動向	森田　安一
第 88 巻第 1 号	2018 年 12 月	シンポジウム	ルターを引き継いで：十七・十八世紀プロテスタントたちの連帯運動	西川　杉子
第 88 巻第 1 号	2018 年 12 月	シンポジウム	教会を持続させた宗教改革：政治思想史的考察	田上　雅徳
第 89 巻第 1・2 号	2020 年 10 月	史料紹介	十七世紀初期イングランドのエステイト管理と専門職：トマス・クレイの著作から	高橋　裕一

近世史内訳：論文 25、研究ノート 5、史料紹介 2、シンポジウム報告・講演録 7（二つのシンポジウム報告は中世史と重複）、書評・新刊紹介 3、博士論文審査要旨 4

近代史関係の研究				
『史学』巻号	公刊時期	発表形態	題名	著者
第59巻第1号	1990年3月	論文	ギルデッド・エイジにおけるプルマン・ストライキについて―ボイコット、連邦介入、州主権の問題―	山口　房司
第59巻第1号	1990年3月	学会動向	フランス革命二百年祭記念を期して発刊された内外の諸著書について	平山　栄一
第60巻第1号	1991年4月	学会動向	「フランス革命二百年祭記念を期して発刊された内外の諸著書について」:『史学』第59巻第1号の誤植訂正と補遺	平山　栄一
第61巻第1・2号	1991年12月	論文	アメリカ都市「コミュニティ」の再生：革新主義時代における「スクール・ソーシャル・センター」運動	佐々木　豊
第62巻第1・2号	1992年11月	論文	シュタイン市制の成立と展開	東畑　隆介
第62巻第4号	1993年3月	論文	ヘンリー・カボット・ロッジの民族観：識字テストによる南・東欧系移民の入国規制をめぐって	山本　英政
第63巻第1・2号	1993年8月	論文	世紀転換期アメリカにおける独占の台頭について：砂糖トラスト判決を中心に	山口　房司
第63巻第4号	1994年8月	論文	シャーマン反トラスト法とその意義：制定百年の回顧と「スタンダード・オイル」、「アメリカン・タバコ」両判決への序章	山口　房司
第64巻第1号	1994年9月	論文	世紀転換期における米国生命保険会社の資金力に関する考察：ビッグ・スリーの投資政策からのアプローチ	紫藤　潤一
第64巻第2号	1995年3月	論文	ニューディール後期の反トラスト政策：司法次官補・反トラスト部長サーマン・アーノルドを中心に	山口　房司
第65巻第3号	1996年1月	論文	二十世紀初頭アメリカにおける自由放任主義、革新主義と福祉資本主義について	山口　房司
第65巻第4号	1996年6月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角(一)	大森雄太郎
第66巻第2号	1997年1月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角(二)	大森雄太郎
第66巻第4号	1997年7月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角(三)	大森雄太郎

第 66 巻第 4 号	1997 年 7 月	彙報	東畑隆介君提出学位請求論文審査要旨「ハノーファー王国の憲法紛争」	
第 67 巻第 1 号	1997 年 9 月	書評	Franz Schnabel, *Zu Leben und Werk (1887-1966). Vorträge zur Feier seines 100. Geburtstages. Herausgegeben von der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften* (München, 1988)	東畑　隆介
第 67 巻第 2 号	1998 年 3 月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角（四）	大森雄太郎
第 67 巻第 2 号	1998 年 3 月	論文	ペルー初期移住者の「転耕・転住・転航」：海外移民の空間的移動と史料	赤木　妙子
第 67 巻第 3・4 号	1998 年 7 月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角（五）	大森雄太郎
第 67 巻第 3・4 号	1998 年 7 月	論文	マルクス、エンゲルスにおける Nation と Nationalität：48 年革命における「歴史なき民」の理論的背景について	勝又　章夫
第 68 巻第 3・4 号	1999 年 5 月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角（六）	大森雄太郎
第 69 巻第 1 号	1999 年 8 月	論文	マッツィーニとイギリス社会運動：1848 年革命を中心に	松本　佐保
第 69 巻第 2 号	2000 年 3 月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角（七）	大森雄太郎
第 70 巻第 2 号	2001 年 2 月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角（八）	大森雄太郎
第 71 巻第 1 号	2001 年 12 月	論文	アメリカ革命とジョン・ロック：アメリカ革命政治思想史研究の一視角（九）	大森雄太郎
第 71 巻第 4 号	2002 年 11 月	論文	スペインにおける地域ナショナリズムと諸社会層：カタラニスモと地主・農民	八嶋由香利
第 72 巻第 1 号	2003 年 2 月	論文	スペインにおける地域ナショナリズムと諸社会層：カタラニスモと地主・農民（続・完）	八嶋由香利
第 72 巻第 1 号	2003 年 2 月	研究ノート	十九世紀前期イングランドに見る実用的「教養」の一事例：L. マリの書物から	高橋　裕一

第 72 巻第 3・4 号	2003 年 12 月	論文	近代イタリア民衆蜂起研究序説：トスカーナ大公国の場合	鈴木　邦夫
第 74 巻第 1・2 号	2005 年 9 月	論文	チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』：十九世紀前半英国の出版文化	伊東　剛史
第 74 巻第 1・2 号	2005 年 9 月	論文	ヘーゲルとプロイセン：教会改革史の視点から見た国家論の位相	守屋　　徹
第 75 巻第 4 号	2007 年 3 月	論文	スペインにおける伝統的社会の変容と人の移動：カタルーニャの交易ネットワークとキューバへの移住	八嶋由香利
第 75 巻第 4 号	2007 年 3 月	論文	シュルツェ・デーリテュと協同組合運動	東畑　隆介
第 76 巻第 4 号	2008 年 3 月	論文	カルロス三世時代(1759～1788)のバルセローナ市における啓蒙と祭り：「聖体祭」のプロセッションを中心に	山道　佳子
第 77 巻第 1 号	2008 年 7 月	論文	オットー・バウアーと民族自治：チェコ少数派学校をめぐって	勝又　章夫
第 77 巻第 2・3 号	2008 年 12 月	論文	「幸福な家族」の肖像：十九世紀ロンドンの「動物史」	伊東　剛史
第 78 巻第 1・2 号	2009 年 6 月	論文	シヴィック・クラン：第二次クー・クラックス・クラン運動の再検討	綾辺　昌朋
第 78 巻第 4 号	2009 年 12 月	論文	Imperium in Imperio：アメリカ連邦主義の進化と財産権の保護：合衆国憲法批准から好感情の時代にかけて	山口　房司
第 81 巻第 4 号	2013 年 1 月	論文	十九世紀スペインの植民地支配と商業移住者のネットワーク：カタルーニャの「インディアーノ」ミゲル・ビアダを通して	八嶋由香利
第 83 巻第 2・3 号	2014 年 7 月	論文	出版の自由と市民社会：バーデン大公国における自由主義者の理念と活動	木村　　航
『史学』未掲載			安岡直君提出学位請求論文審査要旨「初期ルカーチにおける思想形成：『歴史と階級意識』への道：革命的急進主義とその限界」2015 年 2 月 26 日	
第 85 巻第 1・2・3 号	2015 年 7 月	論文	エドゥアルト・ベルンシュタインとユダヤ人問題	勝又　章夫
第 85 巻第 1・2・3 号	2015 年 7 月	論文	アルノルト・ルーゲのフォイエルバッハ受容：三月前期ドイツにおける教会論争の視点から	富村　　圭

第 87 巻第 1・2 号	2017 年 7 月	論文	「ギルドの再評価」と徒弟制度：産業革命前夜のバルセローナにおける絹産業(1770 年～1834 年)を一例として	山道　佳子
第 89 巻第 4 号	2021 年 2 月	論文	産業化以前のバルセローナにおける家業と女性(1770～1820)：絹産業ギルドの親方・職人とその妻、寡婦、娘たちの「結婚契約書」「遺言書」から	山道　佳子

近代史内訳：論文 39、研究ノート 1、書評・新刊紹介 1、研究動向 2、博士論文審査要旨 2

現代史関係の研究				
『史学』巻号	公刊時期	発表形態	題名	著者
第 60 巻第 1 号	1991 年 4 月	書評	Johann Wilhelm Thomsen, *Landleben in der Weimarer Republik*, Heide 1989.	住司　憲史
第 63 巻第 1・2 号	1993 年 8 月	研究ノート	ドイツ(再)統一の評価をめぐって	原　　信芳
第 67 巻第 1 号	1997 年 9 月	論文	アメリカ“赤狩り”時代の極東問題専門家：「学術的客観性」の理念をめぐる論争を中心に（上）	佐々木　豊
第 67 巻第 2 号	1998 年 3 月	論文	パールハーバー攻撃と日系「敵性」外国人	山倉　明弘
第 67 巻第 2 号	1998 年 3 月	論文	アメリカ“赤狩り”時代の極東問題専門家：「学術的客観性」の理念をめぐる論争を中心に（下）	佐々木　豊
第 67 巻第 3・4 号	1998 年 7 月	研究ノート	ドイツ抵抗運動に関する最近の研究動向	原　　信芳
第 69 巻第 1 号	1999 年 8 月	論文	日米戦争中のハワイ日系人社会：軍政府当局の封じ込め政策と日系社会の対応	山倉　明弘
第 71 巻第 2・3 号	2002 年 6 月	論文	第三帝国における保守派抵抗運動のポスト・ナチズム構想	原　　信芳
第 73 巻第 2・3 号	2004 年 12 月	研究動向	アルバニアの風景：国際南東欧学学会第九回大会に出席して	石丸　由美
第 80 巻第 2・3 号	2011 年 6 月	シンポジウム	〔コメント二〕ベルリンの地下壕：特に総統地下壕を中心に	神田　順司
第 81 巻第 1・2 号	2012 年 3 月	論文	パーペン、シュライヒャー内閣の雇用創出計画	原　　信芳
第 82 巻第 4 号	2014 年 1 月	論文	レーニン支配と「赤色テロル」	梶川　伸一
第 86 巻第 3 号	2016 年 10 月	新刊紹介	マルティン・シュレーマン著 / 棟居洋訳『ルターのりんごの木：格言の起源と戦後ドイツ人のメンタリティー』（教文館、2015 年）	野々瀬浩司
第 86 巻第 4 号	2017 年 3 月	論文	ワイマール失業保険危機とモルデンハウアー歳入補填案	原　　信芳
第 87 巻第 3 号	2018 年 2 月	書評	安松みゆき著『ナチス・ドイツと〈帝国〉日本美術：歴史から消された展覧会』（吉川弘文館、2016 年）	山本　晶子

現代史内訳：論文 8、研究ノート 2、シンポジウム報告・講演録 1、書評・新刊紹介 3、研究動向 1